

(二十六) 二人だけの結婚式

がりよう公園の散歩を終えて病室に戻った二人は、最後の別れを惜しむようにじつと見つめ合っていた。沈む夕陽が病室の窓から見えた。飯綱山の上、入道雲に反射する赤や紫や黄色の光が、そこだけ異次元の世界を演出していた。そこへ、飛行機雲を引くジェット機が、通りすぎて行く。住処に帰る鳥たちは、どことなく悲しげで、ゆつくりと動く自然の中で、二人の表情は恍惚として、いつまでも視線をそらすことはなかった。

「浩幸さん？キスしていい……？」

百恵は顔を赤らめながら言った。浩幸は何も答えず微笑みを浮かべ、静かに目を閉じた。百恵は動くことのない浩幸の唇に、自分の唇をそつと重ね合わせた。どれくらいそうしていたらろうか、やがて、唇を離れた二人は微笑み合った。

すると百恵は何かを思い出したように、病室の棚に置いたハンドバックを持ってくると、中から二つに折りたたんだ白い書類を取り出した。

「ジャ、ジャーン！」

甘い雰囲気を一変させる効果音を入れながら、百恵は明るい顔で、その紙を浩幸の顔の前にかざした。見れば婚姻届けに相違ない。届出人のところには、既に夫の欄に山口浩幸の名が、そして妻の欄には馬場百恵の文字と押印が既に押してある。浩幸は驚いた。

「い、いつたい、何をしようというのですか？」

「何をするって、決まっているじゃないですか。結婚式ですよ！」

百恵は精一杯の明るさを装ってそう言った。

「ば、ばかな……」

「私、いろいろ考えたんですけど、やっぱり、浩幸さんが行く前に結婚しておいた方がいいと思って。だって、大樹君の事にしても、浩幸さんのお家の事にしても、奥さんがいた方がいいわ。浩幸さんもその方が安心でしょ？」

「それはいけない！」

「なぜ？」

「何故って……」

「私、もう決めたの！いずれ結婚するんだから、いつでもいいじゃない！それなら早い方

「がいいでしょ——」

「ダメです！」

「どうしてなの？」

百恵の瞳に、水色の涙が溜まった。

「私……、私……、本当はとっても不安なんです。浩幸さんがアメリカへ行ってしまったら、もしかしたら、もう戻って来ないんじゃないかって……。不安で、不安で仕方がないの——」

「百恵さん……」

「お願い、私を一人にさせないで……」

やがて浩幸は諦めたようにため息を落とした。

百恵は動かめ浩幸の右手に彼の印鑑を握らせると、その手を支えながら朱肉を付けて、夫の欄の“印”の字の上に、ゆっくり印鑑の先端を押しつけた。離せば艶やかな朱色の、丸で囲んだ“山口”の文字が、白い紙の上にくつきりと残っていた。そして余白にもう一回、同じ事を繰り返した。百恵は、完成した婚姻届を浩幸に見せて微笑んだ。

「まったく……困った女性だ……」

百恵の瞳から、桃色の涙が流れ落ちた。浩幸はその涙を見ながら、二人目の妻であった好

美の最後の涙を思い出していた。

「これで私達は結婚したのね……」

浩幸は何も言わずに目を閉じた――。

こうして、お父さんも、お母さんも、ましてや弟の太一も知らないところで、私は結婚した――。でも、思っていたより結婚なんて、そんなに難しいものではないことを知った。婚姻届に必要事項を書き込んで、彼の印鑑と私の印鑑を押すだけ。あとは役所に持って行けば、それで終わり。なんだか思い詰めた恋愛の割に、入籍する事がこんなに簡単な事に拍子抜けした感じ――。

浩幸さんは反対したけれど、私はどうしても浩幸さんと離れたくなかったの。それが例え三ヶ月という短い間であったとしても、今の浩幸さんの状態を考えた時、とてもそんな長い時間を待つことなんて、私にはできなかった。

そして、今結婚しておかなければ、なんだか浩幸さんは私の手の届かない、ずうっと遠くの方へ行ってしまうような気がして――。

印鑑を握らせた彼の手は温かかった。どうしてこんなに温かいのに動かないのかと不思議

に思った。確かに彼の手には血液が巡っていたの。私はその手を握って押印をついた。彼の名前と私の名前が並んだとき、私はなんだか無性に嬉しかった。片思いだった時のこと、あの切ない思い出は、きっとこの一瞬の喜びのためにあったのだと思う。

でも浩幸さんの身体は動かない。もしかしたら、一生、彼の介護をすることになるかも知れないとも考えた。でも、私が介護士になったのは、そのためかも知れないと納得できる。

私には彼が必要なの——。

明日、浩幸さんがアメリカへ発つたら、私はこの婚姻届を役所に届け出ようと思う。そうすれば、彼が手術をする間、彼は一人でなくなるし、私も一人ではなくなるでしょう。絶対手術は成功するって思えるの！

彼の寝顔に、私は再びキスをした——。

こうして私は——、山口百恵になった。